

伊奈波神社の花の撓とう

伊奈波神社教学研究員 寛 真理子

毎年旧暦正月晦日に、伊奈波神社の神門内に農作業を模した人形が展示され、農作物や養蚕の豊凶についての神託が金・銀・銅の各色の玉で示されています。この花の撓は、社頭での観覧や、社報・新聞紙上のニュースなどでご存知の方も多いでしょう。神託は小正月の一月十五日の筒粥神事で占われたものです。「撓」は訓読みでは「たわわ」で、実が豊かについて枝がしなうさまを意味しています。

伊奈波神社の祭神であるイニシキイリヒコノミコトは河内国（大阪府）の高石池・茅渟池などを造成し、農業の発展に力を尽くされました。それにちなんで伊奈波神社では旧暦正月十五日に五穀祭と筒粥神事が執り行われてきました。岐阜市歴史博物館に寄託されている資料で私が見た限りでは、その詳しいようすがわかる最

初は明治三十八年（一九〇五）です。この年は二月十八日が旧暦正月十五日で、筒粥神事の神託の結果は数百枚の印刷物にして同月二十日に配布されました。しかし明治四十三年に官暦の旧暦併記が廃止されたことから、同四十五年には筒粥神事も毎年三月一日に祭日が変更されています。

このころにはまだ人形はありませんでした。人形が社頭に飾られるようになったのは大正二年（一九一三）のことと伝えます。これは、神職が氏子や各地の崇敬者に依頼して寄附金をつのり、農業・養蚕の道具、人形、建物など現在も見られるような用具を調えたものです。祭日の準備はかなり大変で、大正三年についてみると、二月十一日の「五穀祭建札」に始まり、二十二日に人形を運び、それ以後飾りつけや幟建てに連日追われ

二十四・二十五両日の祭礼を迎えました。二十四日は美江寺の蚕祭も行われることから多くの参拝者が見込まれ、美濃電鉄・長良輕便鉄道は乗車賃割引サービスを実施しました。この日は天候にも恵まれて全市は終日これら参詣の人をもつて満たされ、電鉄郡部線はことごとく満員にて、岐阜駅乗降客も平素に比し三四割方の増加を見たるべく、又笠松街道は尾張地方より来る人、引きも切らず、近年かつて見ざる人出にて、八間道通りより美江寺一帯は言うに及ばず伊奈波通りは身動きもならぬ雑踏」で市内の飲食店、劇場も入場者が多かったと岐阜日日新聞は伝えています。二十五日には余興に餅投げを予定していましたが、雨天のため一日延期して二十六日に実施しました。神職を始めとする神社職員は夜業しながら神事を執行し、二十六日に飾りを撤収、二十七日に後片付けを終えました。写真1はこのときの印刷物で、神殿の前に稲作（向かって右）と養蚕の風景が描いてあります。

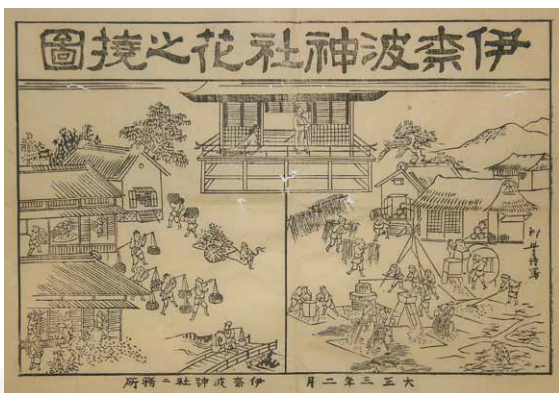


写真1



写真2

この大正三年には新暦一月十五日に筒粥神事が行われています。明治四十五年に三月一日に変更されてわずか二年後ですが、あるいは社頭の人形展示導入にあわせて一月十五日筒粥神事、旧暦正月晦日に花の撓神事という現在の形へさらに変わったものかと思われる。それに伴い、筒粥神事の直後に配られていた神託の印刷物も、花の撓の日に配布することになったでしょう。

大正四年の花の撓も盛況で、農会・

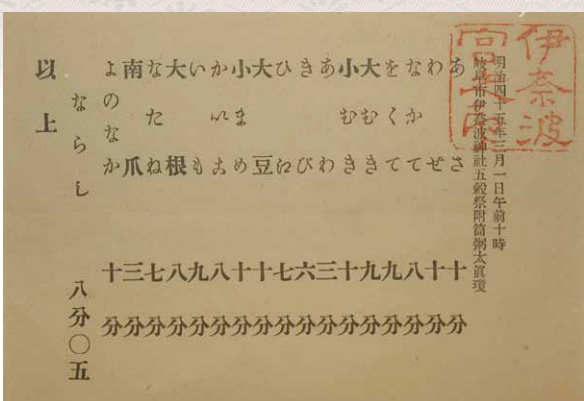


写真3

農林学校・農事試験場が供進した最良粳種が頒布されました。これは、大正三年以前にも行われていたものです。筒粥神事で占われる品目は時代をおって増えています。明治三十八年には麻など十三種でした。写真3は明治四十五年に配布されたものですが、同三十八年に比べるとヒエ・小豆・カボチャと「世の中」が加わって十七種になっています。大正三年は筒竹十九本とありますから十九種が占われており、それまで「蚕」として一区分であった養蚕関係が充実したようです。現在では二十七品目についての託宣が示されますが、農作物の栽培品種の変化によりヒエ・アワ・キビ・麻が姿を消し、柿・玉ねぎ・スイカなどが加わっています。

実は、花の撓神事は伊奈波神社だけで行われているわけではありません。現在の岐阜市内では金神社でもかつては催されていました。その始まりは伊奈波神社よりも少し先輩の明治四十五年のことで、七月八日から

十日にかけての豊年祭で人形が飾られました。そのようすは新聞紙上にくわしくしるされており、米については「俵が倉に九俵積み上がり、一俵が倉に運ばれ、さらに俵に詰めている最中が一俵ある。作業場にはかなりの稲や粳があるが、母屋には一俵もない」、養蚕は「屋外にたくさん籠があり、屋内一杯に繭が積んである」というもので、そこから米は豊作か中作、蚕は豊年と新聞記者は判断しています。伊奈波神社では神託を印刷物にして配りますが、金神社は飾つてある人形から参拝者各自が判断するものでした。この年の新聞記事では「来年からは毎年初午のころに人形を飾る予定」としていますが、翌年以後には旧暦四月八日の花祭りの時期に催されています。大正四年の新聞によると、金神社では伊奈波神社とは異なり、神殿の瓶の中へ水を入れて供え、その水の増減で豊凶を占ったそうです。現在は金神社の花の撓は行われていませんが、そのようすは写真2「豊年祭」図」（岐阜市歴史博物館所蔵）からうか

がうことができます。

岐阜市から視野を広げると、愛知県には熱田神宮、津島神社、豊川市の為当稲荷神社など花の撓が催される社寺はかなりの数にのぼります。最も有名なのは熱田神宮で、ここから東海地方に広がったのではないかと考えられ、岐阜市の両神社についても同神宮から伝わったものと当時の新聞には紹介されています。同神宮の神事はヤマトタケルノミコトがこの地方に農耕や養蚕の技術を伝えたことに由来すると伝え、古くは四月八日（旧暦）であったと思われます。現在は五月八日からで、津島神社などの社寺でも四月か五月に催されています。かつての金神社でも旧暦四月八日でした。伊奈波神社の花の撓はそれらの中で最も早い時期で、東海地方で先頭を切つて催されるものといえます。

今年の旧暦正月晦日は三月八日。この一年の安泰を願って、かわいらしい人形の農作業風景ジオラマを楽しみながら参拝なさつてはいかがでしょうか。